

Title	「労働倫理」：自然随伴性と社会随伴性
Sub Title	"Work ethics" : natural contingency and social contingency
Author	坂上, 貴之(Sakagami, Takayuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.57 (2003. ) ,p.29- 31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	労働倫理シンポジウム
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000057-0029">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000057-0029</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 「労働倫理」：自然随伴性と社会随伴性

坂 上 貴 之\*

## “Work ethics”: Natural contingency and social contingency

Takayuki SAKAGAMI\*

労働は体内に蓄積したエネルギーを消費するのであるから、労働量を最低にすることは、その個体の生存に寄与するものに違いない。しかし一切の労働無しに生存することは難しい。採餌に従事したり、繁殖に必要な活動をしたり、敵と闘ったりすることなど、生存に寄与する大切な労働があるからである。必要な労働によるエネルギー損失を押さえる一方で、その労働によって生存に寄与する出来事やエネルギー獲得を最大にするというのが、最も考えられそうな生き物の方略であろう。

通常、「労働倫理（労働観）」(work ethics)と呼ばれているものは、このような方略の下でなされる労働以上の労働がなされた場合の何かをさしている。例えば、エネルギー損失無しに餌や安全が得られるにもかかわらず、「わざわざ」労働をしているようにみえる場合、特にその動物がヒトであれば何らかの理由づけが必要とされる。この時に労働倫理が持ち出されることがある。しかし、個体の内部にその労働の発生理由を求めようとすれば、他にも内発的動機づけや目的意識、そして信念に至るまで、無数の対立候補をあげることができるだろう。いずれにせよ、もしもある個体の生物学上の方略が必要としている以上の労働がなされているという証拠がひとつでも得られれば、その労働の理由が個体内部から発生する原因と結び付けられる可能性が生まれる。

経済学では所得と労働の関係を表す曲線を、後屈労働供給曲線と呼んでいる。なぜかといえば、横軸を労働量、縦軸を所得とした時、労働量はある所得以上でも以下でも低くなる「後屈」した曲線を描くためである。別の言い方をすれば、労働量を最大にするには「適当な」所得が必要であるということである。さらにもし、同じ所得でより多くの労働を生み出すようになったならば、この曲線はより右側に移動するであろう。この適当な所得の存在や所得の全域にわたる労働量の増加も、労働倫理や動機づけによって説明することができるかもしれない。

経済学では、労働倫理や動機づけ等の個体内部の原因に頼らないで後屈労働供給曲線を説明しようとしているように見える。つまりこの曲線は、異なるいくつかの賃金率曲線と、これに接する、労働量（あるいは余暇量）と所得との間での無差別曲線との関係によって生み出されたと考えている。いいかえれば、後屈曲線のそれぞれのポイントは、それを通る賃金率曲線が接する、最も選好の高い、労働量と所得との組み合わせを表している。こうして労働量を最大化しているものは、単に所得やその所得を生み出す賃金率曲線（どのくらいの労働でどのくらいの所得が得られるかを表した）だけでなく、この無差別曲線がどういう形状となっているのかによるところが大きい。

ヒトの世界の場合、その所得は貨幣のように将来に向けて貯えることができる。しかしインフレ率の

\* 慶應義塾大学文学部教授（心理学）

高い世界での貨幣がそうであるように、動物の世界の食物のような所得は、将来に向けて保存がきかない。一方飢饉になれば、保存できるか否かとは違う要因で食物の価値は高くなる。これらの場合に依じて、当然、無差別曲線の形状は大きく変わってくる。それは後屈労働曲線が示す、労働量を最大にする適当な所得の大きさや、曲線の右へのシフトの大きさも変えるであろう。したがって、検証可能性や論理的一貫性の問題を除けば、無差別曲線は、単に上述した個体内部の原因の代わりにすぎないと言えないことはない。

さて「倫理」である。第 1 報告者 Zentall 氏のパラダイムは、ハトが高い比率を選ぶことを work ethics と呼んでいた。それは、そもそも無駄な労働をできるだけ抑制していると考えられる生き物が、テスト場面で低い反応数を要求される固定比率強化スケジュール (FR1) よりも、多大な労働量を意味する高い反応数を要求されるスケジュール (FR20) の方をより大きな割合で選択したという現象に対して、やや面白おかしく名付けたものであった。この強化スケジュールが決めている 1 単位の餌を得るのに必要な反応数は、後屈労働曲線の話では賃金率の傾きに対応する。しかしすでに説明したように、所得の低いところでは、賃金率の低い (すなわち高い比率) スケジュールの方がより多くの労働を生み出すことがあるのである。したがって、当日の参加者も指摘していたように、広いレンジで比率を変化させることによって選択はどのように変わるのかの関数関係 (functional relationship) が明らかにされる必要がある。そうしなければ、たまたま選ばれた比率が、偶然生み出した結果である可能性を否定できない。

第 2 に考えたいのは、実験の手続きについてである。デンショバトはある手がかり刺激 ( $S_{20}^D$ ) の下で FR20 を経験した後に 2 つの FR5 の手がかり刺激 ( $S_{20/5}^D+$ ,  $S_{20/5}^D-$ ) のどちらかの下で餌を与えられたり (+), そうでなかったり (-) を経験する。同様に別の手がかり刺激 ( $S_1^D$ ) の下では FR1 を経て 2 つの FR5 の手がかり刺激 ( $S_{1/5}^D+$ ,  $S_{1/5}^D-$ ) のどちらかの下で餌を与えられたり、そうでなかったりする。つまり、個体は  $S_{20}^D$  では要求反応数が多いためより苦勞をして  $S_{20/5}^D+$  と  $S_{20/5}^D-$  の 2 つの選択場面に至っており、そのために選択には大きな負荷がかかっている。それに対して  $S_1^D$  では、すぐに  $S_{1/5}^D+$  と  $S_{1/5}^D-$  の選択場面に達し、仮に選択に失敗したとしてもすぐにやり直すことができるのである。こうしてテスト場面で、はじめて  $S_{20/5}^D+$  と  $S_{1/5}^D+$  にさらされたり、 $S_{20/5}^D-$  と  $S_{1/5}^D-$  にさらされたりして両者の内のどちらかを選択しなければならぬ個体は、より注意深い判断を要求された  $S_{20}^D$  側を選択した可能性がある。しかしこのような「情動的価値」による説明は、労働倫理と言い換えてもそれほど大きな違いはないのかもしれないが。

第 2 報告者樽井氏は倫理学から発言を行った。倫理的行為の因果連鎖を明らかにする上で、普遍性を持った価値を想定することがいかなる意義を持っているのかについて、心理学から適切な議論はできないが、個体の内部にあると考えられる何か、動機づけ、目的意識、倫理は、(そして効用すらも) 人間の想像力を逞しく育ててくれる一方で、行為の原因の解明にはあまり役に立たないように見える。もしも労働倫理を生み出すものが何かを知りたいのなら、それが意味する内容を行動によって定義し、その行動を変容する原因を個体の外に求める方が、早道ではないかと考える。

しかしここまで述べてきた観点には、社会的行動としての倫理的行為が論じられてこなかった。労働倫理は、共同体という社会的環境とその歴史によって大きく変容するであろうことから、生物個体の行動方略、「自然的」環境の制御だけで議論することには無理がある。それでも、共同体における労働に関わる歴史を、言語を通して個体の内部へと写しとること、いわば「社会的」環境の内面化としての労働倫理のあり方を、個体の内部にある意識や倫理の真の姿と考えるのであれば、労働倫理を人々がどう考

えてきたか、共同体規範の防衛と功利追求以外の労働倫理のあり方をどう想像していくかについて、心理学はまだ何かを付け加えることができるのかもしれない。

第3報告者宮坂氏は文化人類学から発言を行った。この立場が重要なのは、個体あるいは社会の視点から展開していくことができる労働倫理の問題に、1つの交差点を提供してくれる点である。いうまでもなく、それは労働の発生に関わるフィールドデータである。少ない労働時間しか要求されない世界、労働が共同体の強い制御下でない世界、こうした現在の高度資本主義社会とは異なる世界と比較することは、労働倫理についての新たな観点を提供してくれるに違いない。

しかしながら、上のような私たちの棲む世界と異なる世界において、はたして労働倫理が意味するところは同じなのだろうか。おそらくこうした質問に答え慣れてきた文化人類学には、比較のための方法論があるに違いない。『ヒト以外の動物に「労働」はあるのか』という問いもまた、これとよく似た質問である。文化人類学での方法論は、この質問にも答えることができるのだろうか。

こうして、もし、ある学問分野での比較の一般形式が、他の学問分野に形を変えてでも適用できることが明らかになれば、今回のような多分野にわたるテーマの議論は、真の僥倖に恵まれたといえることになる。